

石臼に似た素朴で力強い美しさ

渡辺 栄一

昔、農家には必ずといっていいほど石臼があった。形の素朴さ、石肌のたくましさ、ズシリとした重さ、穀物を一粒ずつ砕く力強さ。地味な存在だが、日本人の心を映し出すそんな美しさを感じている。

大変恐縮な表現だが、人間・大平先生には、この日本の美・石臼に似た印象を持っている。

大平総理から直接、薫陶をお受けしたのは、それほど長くはない。福田・大平体制といわれた際の大平幹事長のもとで、副幹事長を仰せつかったのが初めてで、それ以後、自民党経理局長、一昨年十一月には大平内閣の建設大臣としてお仕えしたに過ぎない。物理的な時間はきわめて短かったが、私の心に刻まれた教訓は深いものがある。石臼が穀物を一粒ずつ砕くような、あのマジメさには感銘するばかりである。

大平総理は、土、日曜日になると、ほとんど各地方の政経文化パーティーに出席、私も毎回といってよいほどお供の光栄に浴した。

滋賀県の政経文化パーティーに向かう新幹線のなかで、私は「これだけ、休みもとられずお出かけになるのは過重じゃございませんか」と申しあげたことがある。大平総理は「やあ、オレはもう約束しちゃったんだ。約束した以上は疲れたって、がまんしなければならん」と、例によって重い口で答えられた。

その日は、酷暑のなかで屋外パーティーとなり、もみくちやにされ、若い私もへとへとだったのである。それにもかかわらず大平総理は「渡辺君、ひとつ湖上遊覧としゃれよう」といわれ、琵琶湖を周遊。赤潮の発生を見

ると「赤潮の歓迎か」と、おどけておられた。この湖上遊覧も実は旅の慰めではなく、県側が下水処理を含めた琵琶湖開発の遅れを推進するためにお膳立てした「変形陳情」だったようである。どんなに疲れていても、いやな顔をしないばかりか、おどける余裕を示し、約束を着実に実行する大平総理の真骨頂を垣間見た気がする。

私は首相官邸で建設大臣を拝命した時、大平総理から「行政改革と綱紀粛正をしっかり頼みます」と指示を受け、五十四年、福島県郡山に「一緒に一緒に行政改革を推進してくれ」と重ねてご要請があった。

強い口調ではないが、何か重々しい圧迫感があり、私も思わず「必ず実現させます」とお約束してしまった。住宅公団と宅地開発公団の統合は、こうして生まれたものである。この行政改革、綱紀粛正は大平総理が選挙で国民に約束されたものである。

「一言重し、百金軽し」。私は大平総理からいただいた色紙を宝として家に飾っている。カネより男子の言葉は重要で、約束は守れという意味だと思っているが、大平総理は自らの命より大事であるということを実践してしまわれたような感じがしてならない。

衆参両院の同時選挙で自民党が大勝したのは、大平総理の死によって党が奮起したためだという人も多いが、私は大平総理が約束を、石臼で一粒ずつ砕いて行くように、マジメに着実にはたしておられたことに對し、国民が的確に評価をくださったものと信じて疑わない。まさに自民党中興の祖である。

私は、このころ、石臼をいたずらしたことがある。コロッコロッと重々しく回転しその振動は私の心身に伝わってきて、今でも生々しく甦ってくる。

石臼にもなぞらえる人間・大平先生の鼓動は、私の心に生き続け「総理あまり無理をしないでください」と、つい口をつきそうなのである。

(衆議院議員・第二次大平内閣建設大臣)